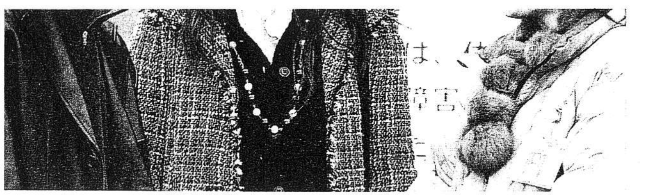

読売プルデンシャル
福祉文化賞

広げたい 笑顔の輪

第4回読売プルデンシャル福祉文化賞

＊ 審査員 ＊

一番ヶ瀬康子（委員長）
　日本福祉文化学会会長
茅根　孝雄
　厚生労働省障害福祉専門官
河野　一郎
　プルデンシャル生命保険元社長
栗原　小巻
　ユネスコ・スペシャルアドバイザー
保高　芳昭
　読売新聞東京本社論説委員

作業所の職員と打ち合わせをする森さん

クールで熱い「商売人」

森　浩昭（44）＝広島市

障害者作業所の販路開拓

「ここが僕の一番楽しい場所なんです」。そう言いながら、森浩昭さん(44)がチャイムを鳴らすと、横引きの扉がさっと開き、女性の笑顔がのぞいた。「あー森さん。ちょうど今、お昼ご飯出来たから食べていって下さいよ」

11月下旬、森さんは広島市中区の精神障害者作業所を訪れた。机に向かいレターセットの模様描きや紙の弁当箱作り、タオルの袋詰めに取り組む15人の通所者たち。「困っていることはないですか」「それなら、すぐ県に電話しましょう」。森さんが、一人ひとりに声をかけていく。

東京での会社勤めを経て実家の料亭にUターン就職したが、「商売以外でも人のために」と、1993年11月から福祉活動「僕らのアトリエ」を始めた。広島市内の障害者作業所の制作品を、企業の店頭などで販売してもらい、その益金が全額作業所に還元される運動だ。

料亭の営業の傍ら、市内約60か所の作業所を回り、それぞれの得意分野を把握している。木工に強い作業所のために、Vリーグ「JTサンダース」選手の人形を作れるよう同チームと交渉し、400体の受注に成功。また、ロウソクを作っている別の作業所には、広島・フラワーフェスティバルで使う「祈りのオブジェ」制作の仕事を取り付けた。材料は、結婚式場で使用済みのキャンドルと竹を調達し、無料ですませた。

「お情けで買ってもらうだけでは先細りする。僕の仕事は、企業や行政のニーズと、作業所の製品をマッチさせること。作業所にも技術の向上を求めます」と〈商売人の福祉〉を強調する。が、クールな言葉と裏腹に、胸に秘めた思いは熱い。少年時代、母親が祖父母を介護する姿を見て育った。働きながら、睡眠を削って入浴や食事の世話をする母。夕方、祖父母の車いすを押して散歩に出かけた背中が目に焼き付いている。「母の方が倒れるんじゃないかと心配だった。あの風景が僕の福祉の原点かもしれない」

「作業所にはビジネスマインドを持った指導者が必要」が持論。企業と作業所をつなぐコーディネーター養成講座の開設を大学へ提案し、行政と民間の垣根を超えた異業種交流会「福祉を語る会」も運営する。

「受賞を機に、多くの人に現状を知ってもらい、『もうかる作業所』を作りたい。先は長いけど不可能じゃないはずです」

車いすのおもちゃに、
笑顔を見せる百花さん
（左）と未友木さん
▼

乗る人の心 体感

矢野未友木(39)**・百花**(10)

＝大阪市

車いすのおもちゃ制作

再生紙を使って車いすなどを組み立て、車いすに乗る人の気持ちを〈体験〉してもらう工作キットを、母子いっしょに開発した。矢野未友木さん(39)の長女、百花さん(10)の言葉がきっかけで誕生したキットは、障害者に対する理解を静かに広げつつある。

使用済み牛乳パックを使った再生紙で型紙を作り、車いすや人、動物などの形をくりぬいて組み立てる。好きな色を塗ってオリジナルデザインを施すこともできる。車いすに乗せるハートの型もあり、これは作り手自身を表すという。

矢野さんのホームページ（http://kids-heart.net）を見た人らから、これまでに数百セットの注文があった。キットを使った母親から、「障害を持つ子を、姉が『ずっと座りっぱなしだったんだね』と優しく思いやった」と感激したメールも届いた。

百花さんが生後7か月で脳性まひと診断された後、矢野さんはいくつもの病院を訪れたが、矢野さん自身、百花さんの障害を受け入れ切れない気持ちが残っていた。

転機は、実家のある金沢市で小児科医から聞かされた言葉だった。「僕は障害を持つすてきな人にたくさん出会った。この子にいろんな経験をさせてあげてね」。涙がこぼれ、視野が広がったように思えた。

だが街角で、乳母車や車いすに乗った娘に向けられる視線は決して温かくはない。百花さんが3歳のころ、「お母さん、どうして車いすのおもちゃがないの」と尋ねられ、厚紙を切って車いすを作ったことがあった。車いすのおもちゃは、どこを探しても市販されていなかった。

2年前、母子で出かけた米国旅行。フロリダでは、車いすの車輪に描いたアニメのキャラクターに、見知らぬ人々が「かっこいいね」と百花さんに話しかけてきた。娘連れの父親は、わが子が笑顔で百花さんにあいさつするよう「スマイル！」と促した。社会が障害者を自然に受け入れようとしていた。厚紙の車いすを普及させることで、社会に優しさを広げられるのではないか。そんな確信を抱いた。

帰国後、包装資材会社を説得し、紙の車いすの商品化に協力してもらうことができた。型紙のセットに添えた小冊子（19㌻）には、「私は車イスのそのままの私が大好きです」という百花さんの言葉を収録した。「車いすには、皆さんと同じように喜びや痛みを感じる心が乗っているのです」。そんなメッセージを込め、新たなデザインの発売も計画している。

奨励賞（敬称略）

▽佐藤きみよ(44)(札幌市)＝人工呼吸器使用者の支援活動
▽海外に子ども用車椅子を送る会(東京都福生市)＝車いすを修理し、海外に寄贈
▽田野智子(45)(岡山市)＝障害者の芸術活動を支援
▽不登校情報センター(東京都葛飾区)＝不登校者やひきこもりの若者を支援する情報提供
▽要約筆記高知・やまもも(高知市)＝難聴者のための要約筆記活動

1月29日フォーラム 200人を招待

今回の大賞受賞者をパネリストに迎え、1月29日（月）午後2時から、東京都渋谷区代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで、フォーラム「あすの福祉文化を考える」を開きます。先着200人を無料招待します（定員になり次第締め切り）。申し込みは、はがきに郵便番号、住所、氏名、電話番号、参加人数を書き、読売光と愛の事業団（〒100・8055東京都千代田区大手町1の7の1、電話03・3216・4921）へ。

▽主催　読売新聞社　読売光と愛の事業団
▽後援　厚生労働省　日本福祉文化学会
　　　　プルデンシャル生命保険

見た目は同じ でも……

ハート・プラス

屋市
活動

障害を持ち、他の2人、清水克俊さん(38)＝岡山県＝と村主正枝さん(32)＝東京都＝も腸や肺などに疾患を抱えている。

体調面での制約が大きいため、会の活動はインターネット上の広報活動などが中心だ。名古屋市に事務局を置き、ホームページからマークやチラシをダウンロード出来るようにする一方、国や自治体などに陳情し、施策への反映を訴える。

会員は約670人。疾患の部位や障害の度合いが異なる者同士が、共通の悩みを解決するために協力しあう組織が出来た意味は大きく、昨年開催された「愛・地球博」（愛知万博）会場内のケアセンターや、愛知県尾張旭市の障害者用駐車場にハート・プラスマークが掲げられたりするなど、成果が表れ始めている。

ただ、一般への浸透はまだ十分とは言えず、マークを知らない人も多い。就職や恋愛などに際して、自分が内部障害者だと言い出せない人もいる。

医療の発達で、以前であれば助からなかったような疾患や障害を抱えた人が永らえるケースも増え、内部障害者は今後さらに増えるものと予想される。「受賞を励みに、ハート・プラスマークが、車いすをデザインした障害者マークと同じような認知度を持つ日が来るまで、粘り強く活動を続けていきたい」と村主さんは話している。

小林製